
GODEATER ~ 三爪炎痕の記録 ~

陸茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GODEATER ～三爪炎痕の記録～

【Nコード】

N7184Z

【作者名】

陸茶

【あらすじ】

フェンリル極東支部に兩宮リンドウが入隊し2年がたった頃、そこではある「奇妙な噂」が流れていた。

それは「討伐対象に三筋の炎の爪痕が残され殺されている」という噂。

リンドウは噂の真相を確かめるべく調査に向い、そこで「三爪炎痕」と呼ばれる正体不明の生物に遭遇する。

これは「三爪炎痕」とリンドウ達アナグラメンバーの記録。

「三爪炎痕」は何者なのか？何を目的とし荒神を殺していたのか
そしてリンドウ達と共に過ごし何を感じるのか……

第0話 プロローグ（前書き）

フェンリル極東支部に雨宮リンドウが入隊し2年がたった頃、そこではある「奇妙な噂」が流れていた。

それは「討伐対象に三筋の炎の爪痕が残され殺されている」という噂。

リンドウは噂の真相を確かめるべく調査に向ったのだが……

第0話 プロローグ

2063年

贖罪の街

「ぶっ……」

荒れ果てた教会の中で、雨宮リンドウはタバコを口にくわえ火を付ける。

「しっかし……こりゃなんなんだ？」

目の前の死体に刻みつけられた特徴的な傷跡を見てリンドウは露骨に顔をしかめた。
そして頭をポリポリとかく仕草をしながら周囲に広がる惨場を見る。リンドウの周囲に広がるのは生命活動を終え、すでに事切れた生き物たちの残骸と体液。

「最近はコレばっかじゃねえか……」

まあ、おっさん的には仕事が減って楽なんだがなあ」

リンドウはまた、ひとりごちを始めていた。

最近はこの事ばかり起きている。

ミッションを受注し、現場に向かうと討伐対象は既に死んでいて現場、または討伐対象に特徴的な傷跡だけが残されている。

「お前さんは、見たのかい？」フレイムエッジ 『三爪炎痕』を」

リンドウはソレに向かって訊ねた。

だが、リンドウの瞳に映るソレは何の反応も示しはしなかった。

ただカツと見開いた瞳に、まるで鏡のようにリンドウを映しているだけ。

当たり前だ。

ソレはとうの昔に生命活動を終えていたのだから。

その死体みに三筋の炎の爪痕を刻まれて。

ソレを一言で表すとすれば、『異形』である。

虎といったか そんなことは、まあどうでもいい。

その虎とか言ったものを連想させるモノの体軀は非常に大きかった。リンドウが子供に見えてしまうぐらいソレは大きい。

また、ソレには既存の生物にはない特徴的な個所がいくつか存在する。

例えば首の後ろから生えた幾枚の花弁にも見える金色の体皮。

殆ど欠損はなく、まるでそれは獣の王のみが身に着けることを許された外マント套。

そしてリンドウへと向けられる赤く濁った、御世辞にも決して綺麗

とは言えぬ瞳。

白く豊かなひげを蓄えたソレはまさに、暴虐の限りを尽くす王の形相。

ソレはヴァジユラ神種の中でも特に強大な力を持つ

帝王『ディアウス・ピター』

と呼ばれる存在。

人面獣身のその異形^{からだ}。本来ならば決して存在してはいけないモノ。

だが、今はそのような異形で世界は満たされている。

正しい進化を遂げていたならばこのような異形^{せいぶつ}は、決して生まれな
い。

正しい生態系からも決して誕生しない異形^{せいぶつ}。

やがて、このような異形の生物

生物と呼んでいいのかすらも怪しいモノたちは、かつて『日本』と
呼ばれていた国に伝わる八百万^{やおよろず}の神にたとえられるようになり、『
アラガミ』と呼ばれるようになった。

「答えられるワケ、ないよなあ……帝王さんよ?」

モノ言わぬ帝王から視線を戻し、二本目のタバコに火を付けようと
した瞬間

リンドウの感覚が周囲に生まれた気配をとらえた。

「まいったね、こりゃ……ちいーとばかりのんびりし過ぎたか？」

リンドウはタバコに火を付けるのを止め、懐にしまい立ち上がり、彼は壁に立てかけておいた己の武器を握りしめた。

ソレは一見すると巨大な鉄の塊にも見える。

だがよく見ると、ソレはリンドウの身の丈ほどもある巨大な剣だった。

鮮血に彩られたかのような赤いチェンソーの刀身を持つ巨大な剣をリンドウは軽々持ちあげる。

そして周囲に目を走らせた。

荒れ果てた教会のあちらこちらから気配の主、『アラガミ』達はソノ姿を現す。

般若の面とも、鬼のモノとも取れる奇怪な尾を振り上げ、その双眸に獐猛な狩人の目と同じ光を宿し、近づいてくるのは『オウガテイル』とよばれる『アラガミ』。

『オウガテイル』と言うアラガミは先程の帝王に比べその体は小さい。

単体の強さもそれほどではなく、新米のゴッドイーター達の初陣の相手にされることが多い。

だが、群れられるとそれなりの脅威となる。

「ちやつちやつと『コア』を回収して帰りゃ良かったな……」

リンドウは帝王をちらりと一瞥すると、肩を竦めアラガミ達に視線を戻す。

そして彼は八百万の神々に例えられた　アラガミ　を屠る事の出来る、唯一の剣『神機』をその手に構えた。

『アラガミ』は非常に特異で厄介な性質を持つ。

その性質とは、ありとあらゆる物質を『捕喰』すること。

コンクリートや鉄などの無機物だろうが、動植物の様な有機物だろうが関係ない。

例え同じ種である『アラガミ』だろうと奴らは関係なく『捕喰』する。

そればかりか『アラガミ』は自らが捕喰した物体の情報を己が身に取り込み、その体を『変化』させる。

しかもそのスピードは恐ろしく早い。

世界が、動植物が、人間が長い年月を駆け行ってきた進化のスピードなんか比べ物にならない程に。

まさにそれは『アラガミ』と言うの名の通り、人智の及ぶことの無い『神』の領域に等しいモノ。

奴等がそんな性質を持っているからこそ、帝王『ディアウス・ピター』の様な『アラガミ』の中でも上位とされる力を持った『アラガミ』を、こいつ等なんかに喰らわせるわけにはいかない。

絶対に　。

オオカミの様に巨大な顎の奥から低い唸り声をあげ、『オウガテイル』の群れがリンドウを取り囲む。

「美人のお姉さん方に囲まれるのなら大歓迎なんだがな……」

構えた神機をダラリと下げて、ふと思う。

目の前にいるのが『アラガミ』とは言え、やはり軽口を叩ける方が調子が良いようだ。

リンドウはゆっくりと足を踏み出し、無造作ともとれる挙動でオウガテイルの間合いへと侵入していく。

オウガテイルの動きにも「迷い」といえそうなモノは見受けられなかった。

それはオウガテイルという一つ生命体の意志なのか、それとも本能か。

はたまたオウガテイルの身体を構築しているオラクル細胞一つ一つの意味なのか

オウガテイルは自分の間合いに入ってきた哀れな獲物を捕食せんと、その巨体を支える両脚と悪鬼の様な尾に力をこめる。

両脚の筋肉はギリギリ……と、力を加えられ軋むバネの様な音が聞こえそうな程に盛り上がってゆく。

そして、オウガテイルはその力を一気に開放し獲物へと飛び掛かる。リンドウの目の前に、大口を開けたオウガテイルが迫る。

下顎から突き出る鬼の角にも見て取れる双牙は、いとも容易く獲物を貫き通し、その肢体を一切の容赦なく、誰のものと分からぬただの肉片へと変えてしまうのだろう。

「《アラガミ》様の熱いキッスはお断りさせてもらおうか……!!」

刹那、リンドウの右腕が跳ね上がり神機ブラッドサージはの刃がオウガテイルの首をとらえた。

「うおおおおおおつ!!」

一瞬、右腕の筋肉が膨れ上がる。

リンドウはオウガテイルの首筋に食い込んだブラッドサージの刃をねじ込む。

刃をねじ込まれたオウガテイルの首は切り飛ばされる。

首を失ったオウガテイルは鮮血を吹き出しながら地に伏した。

オウガテイル達は低いうなり声をあげながら後ずさり、リンドウから少しばかり距離を取る。
それらの発した唸り声は人間であれば警戒メッセージの声だったのかもしれない。

もっとも《アラガミ》に感情があるとは思えないが。

リンドウはその場を動かず、ブラッドサージを構える。
彼のその瞳は完全に狩人のソレだった。

「……………!?!」

突如、異様で強大なプレッシャーをリンドウは感じた。
そして彼はさらに感覚を研ぎ澄ませる。
オウガテイル達はというと、蜘蛛の子散らすようにして足早にその
場から去って行った。

「この感じ……まさかと思うが、な」

リンドウは神器を構え、周囲を警戒しながらゆっくりと朽ちた教会
を出る。

そして彼はCエリアと呼ばれるこのエリアの中ではかなり開けた場
所に来た。

彼はCエリアの中腹、教会へ入るもう一つの入口の所まで来ると壁
に身を隠し「ふう」と息を吐きだした。

リンドウが気を引き締め直し再びその身を戦場へと投じた次の瞬間、
プレッシャーの主はその姿を現した。

第0話 プロローグ（後書き）

読みづらいところがあったので訂正しました。
本文に変更点はありません。

第1話 遭遇

その強大な威圧感プレッシャーを放つ主は、リンドウの真正面にある一際巨大なビルひときわの中央に空いた大穴から降り立った。

その姿を見たリンドウは、自身の身体が硬直するのを感じた。

（冗談だろ……？）

身体からドツと汗が噴き出すのをリンドウは感じた。

ソレは神の様にも見て取れた。

その昔、空を支配していたという驚を連想させる一対の巨大な翼の如き手腕。

二本の足で屹立し人間の様な腕を胸の前で組み、地を這う人間を睥ムシケラ

睨^{メカク}する女型の武人。

その顔は獅子と人の合わさったかの様なもので、頭には古代エジプトの王族たちが被っていた鎧兜を連想させるものを被っていた。その体は妖しくも艶やかな淡紫の光に包まれ、他のアラガミと一線を規す神々しさと禍々しさを放つ。

(資料でしか見た事はねえが……間違いねえ、コイツはヘラー！！)

そのアラガミはシユウ神種が共食いの末に生まれたと聞く。内に秘めたる力は既存のシユウ種等とは比べモノにならないほど高く、鋼鉄の壁すら容易に破壊すると言う。

ヴァジュラをいとも容易く討ち果たしたといった噂話も耳にしたこともある。手腕のたった一振りで、だ。

だがそれもヘラの力のほんの一部に過ぎないのだろう。

その気になればヴァジュラの上位種、天帝ディアウス・ピターすらも一瞬で屠れるだろう。

そんな実力未知数のアラガミ、『ヘラ』を喰らうことのできる戦士^{コッドイーター}はこの極東支部にも、いや世界中のどの支部にも居ないだろう。彼はわかっていた。

これは、具現化された『絶望』と『死』であると。

「一体何をやってんだ、観測班の奴らは。

ヘラが居るなんて聞いてねーぞ……」

リンドウは身体を押しつぶされてしまいそうな程のプレッシャーに

耐えながらも、毒づいた。

観測班が日々アラガミの発する特有のパルス、《偏食場パルス》を観測しているのはこういった乱入者イレギュラーの登場を事前に知らせ、最悪の事態を回避するためである。

だと言うのに、乱入者イレギュラーの登場。

それも通常種よりも遥かに強い力を持った第二禁忌指定種の登場という、最悪の事態は起きた。

これは、帰ったらビールやタバコの2、30本はもらわなければ気が済まい。

もっとも、生還せいざんすることができたならば、の話であるのだが。

「観測班のやつら……帰ったら覚えとけよ」

リンドウは恐怖に震える身体をどうにかして動かし、壁に背を付けたままゆっくりと顔をのぞかせる。

幸いなことにヘラはリンドウに気づいてはいないようだった。

ビルの麓ふもとにある高台に立ち、周囲をキョロキョロと見渡すだけでそこから一歩も動く気配が感じられなかった。

(アイツ……何か様子がおかしいな)

リンドウは落ち着きを取り戻したことでヘラの様子がおかしい事に気が付いた。

その体は、よくよく見るとリンドウが資料で見た姿と大分違う。

鷲の翼を思わせる一対の手翼の一方は半ばから切断され、もう一方の手翼も下の部分の所々が鋭利な刃物で切り取られたかのように欠けている。

さらに下半身の模様に見えた幾本もの筋は、模様ではなく欠けた脚部に走る亀裂。

頭部の威厳ある兜も無残に叩き割られ、生物のソレとはまた違う異質な断面を覗かせていた。

満身創痍。

と、という言葉が一番ふさわしいのではないのだろうか？

リンドウがそう思う程にヘラはボロボロだった。

ヘラは高台から降り歩き始める。

ただ、そこには普段の狩人の様な堂々とした態度は見られず、何かに怯え数歩歩くたびに立ち止り周囲を確認する。

その姿はまるで天敵から逃げる小動物のそれと違っていい。

(何から逃げてるってんだ……？)

相変わらずリンドウは顔だけを覗かせてヘラを観察していた。

前述の通り、ヘラの行動は明らかにおかしい。

明らかなのは『何かから逃げている』ということ。

ヘラはアラガミの中でも最上位とされるほどの力を持っている。
そんな存在が何かに追われているというのは、にわかには信じがたい話である。

（あれほどのアラガミを、あそこまで追い詰められるヤツなんか俺はしらねえしなあ……）

少なくともヘラを追う正体不明の「何か」にはヘラを凌駕する程の力がある。そんな力を持つ存在をリンドウは知らなかった。

（ただのアラガミなんか歯が立たねえだろうしなあ……て、なるとスサノオとかか？）

リンドウがそんなことを考え始めた瞬間に彼は、ヘラなど比べ物にならない程のプレッシャーを感じた。

（次から次へと……今日はなんなんだ！？）

リンドウの身体が、生存本能が彼に『逃げる』と警鐘を鳴らす。

それでも彼は動かなかった。

否。彼は　リンドウはヘラを観察していた時の姿勢そのままに動けなかったのである。

ヘラはというと、自身が出てきたビルの大穴へと向き直り臨戦態勢を取っていた。

ヘラの出てきたビルの大穴から『ナニカ』が落下した、と思った瞬間

間。
偽りの神、ヘラはその生涯に幕をおろしていた。

その身に、『三爪の炎の爪痕』を刻まれて。

直後、ヘラの身体に刻まれた傷跡から、間欠泉の如く紫炎が噴き出す。だが紫炎はすぐに治まり、吹きけされる蠟燭の燈火のようにして消えた。

リンドウは驚きを隠せなかった。
むしろ、驚きを隠せ、という方が無理だろう。
手負いと言えど相手は腐ってもアラガミ。

ソレを一撃の下に屠ったのは紛れもない、自分と同じ人間。

それもまだ^{よわい}齢15、6程にしが見えぬ、顔にやや幼さの残る少女。服の隙間から覗く白雪の様な柔肌。艶やかで流れるような黒い髪。吸い込まれてしまいそうな程に美しく透き通ったアクアブルーの瞳。

そんな少女がヘラの生涯に幕を下し、死を与えた。

「お前、何モンだ？」

……まさか、嬢ちゃんが『^{フレイムエッジ}三爪炎痕』なのか？」

リンドウはは耐え難い恐怖心を抑え平常を装って訪ねた。
少女は振り向かないどころか返事もしない。

「無視か……冷たいな、嬢ちゃんは」

二度目にして少女はリンドウに向き直った。

(……っ！？)

直後リンドウはその場から飛び退き、少女から距離を取っていた。
別に少女の顔が鬼の様だった、とかそんな理由ではなく。
人は余程の事が無い限り、距離を取ったりはしない。
リンドウが飛び退いた理由、ソレは目の前の少女にただ“睨まれた”
だけ。

人類の天敵、絶対の捕食者、アラガミに囲まれても決して逃げ出さ
なかったリンドウは今すぐにも逃げ出したかった。

目の前にいるただの“少女”から。

無意識、いや防衛本能で神機を構えるリンドウを見て、少女はその
口を開き問う。

「貴男は、敵か？」

「……は？」

リンドウはこの場にそぐわぬ、間の抜けた声を出していた。
少女はしっかりとリンドウを見据えたまま、再度問いかける。

「貴男は私の敵なのか、と聞いた。敵か味方が、どっちだ」

「敵じゃない」

「そう」

少女は短くつぶやくと、ヘラの死体をそのままにリンドウに背を向け歩き始めた。

ピピピピ……

リンドウの胸ポケットで小さく鳴り響いた電子音を少女は聞き逃さ

ず、少女は歩みを止め向き直る。

「その音、何？」

「ん？電子端末の着信音さ」

「でんしたんまつ……？」

「電子端末を知らないのか、嬢ちゃん？
簡単に言えば、電話みたいなものか」

「……でんわ？」

少女は小首を傾げ考え始めてしまった。

反応を見る限り、少女は本当に知らないようだ。
外部居住区の間でも電子端末や電話ぐらい知っている。
なのにこの少女は知らない。
つまり、外部居住区出身ではないということになる。

（やっぱり、この少女があのかねえ）
『フレイムエッジ三爪炎痕』
（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7184z/>

GODEATER ~ 三爪炎痕の記録 ~

2011年12月25日15時46分発行